様式Ｆ－１９

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 24 日現在

機関番号：１３７０１
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2011　～　2012
課題番号：２３６５９２５５
研究課題名（和文）　がん集学的治療体制の構築からみるコモンズ理論の発展と応用に関する研究
研究課題名（英文）Study on development and application of commons theory
- From the viewpoint of multidisciplinary treatment of cancer-

研究代表者
谷口　泰弘（TANIGUCHI YASUHIRO）
岐阜大学・大学院医学系研究科・助教
研究者番号：９０３５９７３７

研究成果の概要（和文）：

がん診療連携拠点病院制度に着目し、がん医療の均てん化の施策が地域に浸透するのか、社会的共通資本として、各拠点病院が機能するのかを医療社会学的観点から考察した。医療圏で状況は異なるものの、医療者のコミュニケーション能力等を含む技術や意識の向上や、地域連携クリティカルパスの運用の在り方､緩和医療の実践などが障壁になっていることがわかった。補助のあり方を改めるなど、必要な対策を取れば、均てん化に近づけることが示唆された。コモンズとしての医療を拡充するために、地域性を後押しする政策を展開する必要がある。

研究成果の概要（英文）：

I think it required to improve the environment which can be used in a community, in order to offer medical care with sustainability. To do this, iIt is necessary to go over medical care in a new view like public land in it, without considering medical care with the confrontation axis of a public and an individual. In each community, I tried for consideration whether for equalization of the medical care about cancer to have progressed from the viewpoint of medical sociology as the field of research paying attention to the system of the designated regional cancer centers and hospitals.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
交付決定額	400,000	120,000	520,000

研究分野：バイオエシックス，医療社会学
科研費の分科・細目：境界医学・医療社会学
キーワード：コモンズ，がん診療連携拠点病院

１．研究開始当初の背景

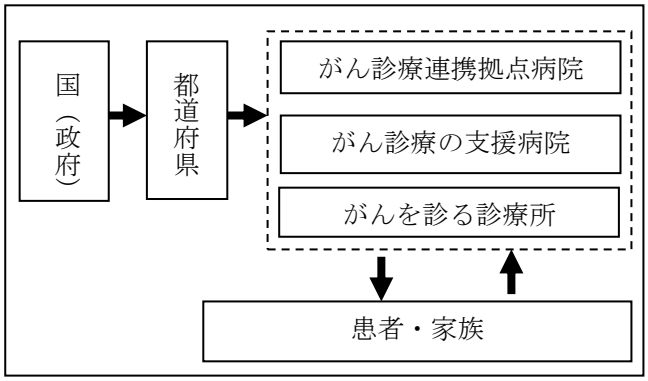
患者の自己決定を中心とする「個の生命倫理」に関する視点や価値は重要であるが、公共政策・組織論からも生命倫理を包摂した医療社会学研究を行うことは重要である。持続可能性のある社会資本としての医療は生命倫理上の研究すべき問題であるが研究成果の蓄積は少ない。本研究者はこの側面を継続して研究を行ってきた。

平成 16/17 年度には、科学研究費補助金（市場理論を応用した医療における情報の非対称性緩衝に向けた研究（課題番号 16790300））を得た。情報の非対称性に関するメカニズムを研究し、さらに医療資源の配分問題と関連づけてきた。研究により医療行政対医療の市場化の構図には限界があると指摘した。また、平成 21/22 年度には、科学研究費補助金（医療におけるコモンズ理論を応用した問題解決モデルの構築に向けた研究（課題番号 216589126））を得て、医療を公的規制と市場化という対立軸で考えず、利害関係者が各々のコミュニティの中で最適な医療が提供される環境を整えることの必要性を示した。当該研究から、医療をコモンズ（共有地）のような発想で捉え直すことの必要性を指摘してきた。

２．研究の目的

がん対策基本法（平成 18 年 6 月 23 日法律第 98 号）が施行され、本邦のがん対策はがん対策推進基本計画（平成 19 年 6 月 15 日閣議決定）に基づいて推進されている。診療面については、がん医療の均てん化を目指して、がん診療連携拠点病院を中心にがん集学的治療体制の構築が進められている（従来モデル（図 1））。がん医療に係る施策が地域に浸透しているのかという点に関心を持ち、 研究を継続してきたコモンズ（共有地）という視点から地域に根差した社会的共通資本としてのがん診療連携拠点病院制度が機能するのかを一つの研究フィールドと捉え、生命倫理および医療社会学の観点から研究を行うことを計画した。コモンズという考え方が医療政策を立案する際の新たな視点として加わるのか調査事例をもとに検討し、新しいモデルを探索し、コモンズ理論の発展と応用について考察した。

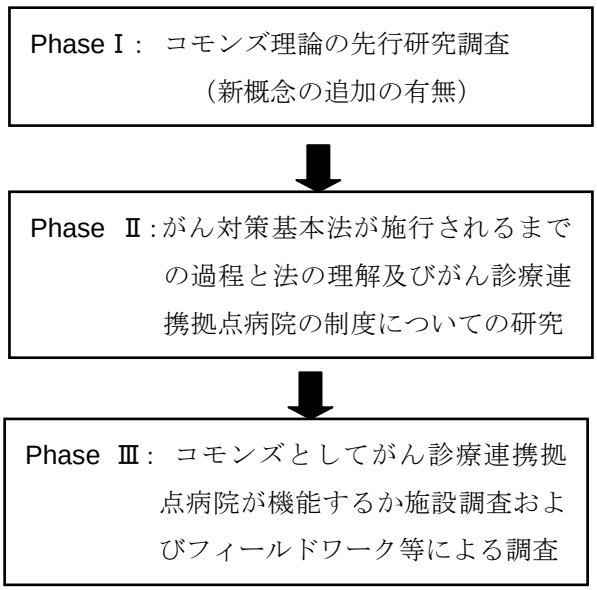
【図 1】　従来の縦割り型モデル



３．研究の方法

本研究は次の手順のとおりに進めた。大きく区分けして前段部分として、フェーズⅠの社会学・経済学領域とフェーズⅡの法学領域の部分は文献リサーチの手法で行い、がん診療連携拠点病院制度とコモンズの親和性の可能について調べた。次の後段部分は、フェーズⅢの施設調査（フィールド領域）を中心に進め、調査のデータをもとにフェーズⅣの総合政策領域の部分でまとめる作業を試みた（図 2）。

【図 2】研究の手順（フローチャート）



Phase Ⅳ：考察を加え、政策関与の在り方を探る

まとめ
Phase Ⅰ-Ⅳ を総括する

４．研究成果

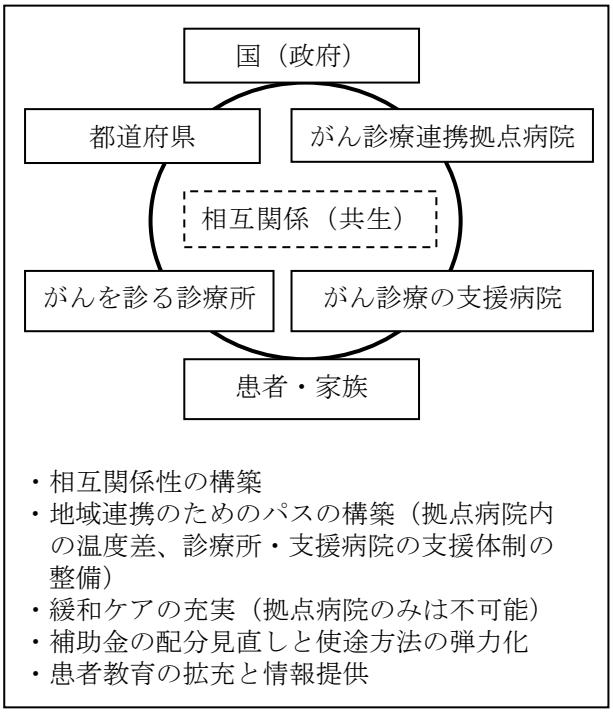
がん診療連携拠点病院制度に着目し、がん医療の均てん化のための施策が地域に浸透するのか、コモンズ（共有地）という視点から社会的共通資本として、各がん診療連携拠点病院が機能するのかを考察した。実施した施設調査をもとに外形上の診療機能とは別の視点から問題点を洗い出した。

結果、各医療圏で状況は異なるものの、医療スタッフのコミュニケーション能力等を含めた技術や意識の向上や、地域連携のためのクリティカルパスの構築運用の在り方、緩和医療の理解と実践などが克服すべき課題であることが分かった。これらは患者側も求める医療の基軸部分であるが、行政側の補助が壁になっていることがわかった。都道府県で補助の金額に多寡があることや使途要件の複雑さが影響していた。さらに、がん医療は拠点病院だけで完結せず連携が奏功して初めて地域のがん医療の均てん化が進むものである。しかし、がん医療は高度なものとして切り離されてきた診療所等との連携強化や医療者間の相互理解を進める施策が不足していることがわかった。

まとめとして、がん診療連携拠点病院の存在をコモンズの一展開として捉えて良いと考える。がん医療の現場は葛藤を抱えつつも患者、地域に適応しようと常に変化している。がん患者の背景は多様でありその医療選択も複雑系に富むが、個別具体的な患者を支援するがん医療政策の中に共生を念頭に入れた財政措置を含む柔軟な対応がなされれば、安定したがん集学的医療が展開されると期待できる。

がん診療連携拠点病院についての施設調査およびフィールドワークを実施し、これをひとつの事例としたが、取組みの方向性を示すことで医療におけるコモンズは醸成されると考える（図 3）。

【図 3】　コモンズ形成モデル



５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

① 谷口泰弘：コモンズとしてのがん診療連携拠点病院の役割－正義論の視点から－. 日本社会医療学会誌「社会医療研究」査読有. 10：3－9, 2012.

② 谷口泰弘：がん医療の均てん化に係る政策支援に関する研究－がん診療連携拠点病院の課題－. 日本社会医療学会雑誌「社会医療研究」. 査読有. 9：3－11, 2011.

〔学会発表〕（計 2 件）

① 谷口泰弘：がん診療連携拠点病院への政策支援の課題－社会的共通資本としての視点から－. 第 24 回日本生命倫理学会年次大会, 2012 年 10 月 27 日. 京都. 日本生命倫理学会第 24 回年次大会プログラム・予稿集：55, 2012.

② 谷口泰弘：コモンズとしてのがん診療連携拠点病院の役割－正義論の視点から－. 日本社会医療学会第 12 回学術大会. 2011 年 10 月 30 日. 延岡. 日本社会医療学会第 12 回学術大会プログラム予稿集：19, 2011.

６．研究組織

(1)研究代表者

谷口　泰弘（TANIGUCHI YASUHIRO）

岐阜大学・大学院医学系研究科・助教

研究者番号：９０３５９７３７

(3)連携研究者

塚田　敬義（TSUKATA YUKIYOSHI）

岐阜大学・大学院医学系研究科・教授

研究者番号：３０２５７８９４